はじめに

お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員　**三村　恭子**
お茶の水女子大学大学院博士後期課程、COE 研究員　**武内　佳代**

本冊子は、21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」（F-GENS）（2002-2007 年度）における、若手研究者のネットワーク JSGS-Net（若手研究者ジェンダー・スタディーズ・ネットワーク、Junior Scholars' Gender Studies Network）の、初の分科会として 2007 年度秋に発足した「若手研究者と育児ワーキンググループ」（以下、WG）の活動・研究報告である。WG 発足の経緯については、本冊子の「若手研究者と育児ワーキンググループのあゆみ」（13 頁～）に譲ることにして、ここでは WG の問題設定や視座について触れておきたい。

本 WG は、その名称からもわかるとおり、若手研究者に焦点を当てている。今日、ようやく女性研究者支援の一環として育児支援体制が強化され、少しずつ予算も割かれるようになってきている。だが一方で、非常勤講師といった専任職にない者や大学院生など、これからの研究を担う、経済的にも立場的にも不安定な時期を過ごす若手研究者への育児支援はいまだ充実しているとは言いがたい状況にある。しかし、そうした不安定な時期においてこそ、もっとも妊娠や出産といったさまざまなライフイベントを経験する若手研究者は多いのである。そして、なかには、その不安定さゆえに研究生活を一時断念するものも少なくない。こうした状況のなかで、これまで私たちは、若手研究者という立場から考察・提言の発信を行なうため、いまだ小さなボランティアベースである本 WG のできうることを模索してきた。

その具体的な活動報告は、基本的に本冊子の実践編にまとめた。F-GENS 関連イベントにおける託児サービス導入の記録やそこから得られた知見からの提言、さまざまな学会における託児サービスの状況や大学内保育施設に関する情報、そして優れた女性研究者ロールモデルの提示、これらは今後あらゆる若手研究者がライフイベントの一つである育児と研究活動とを両立していくための重要な知識と視野をもたらすものと確信している。

ここで急いで確認しておかなければならないのは、本 WG が重視しているスタンスだろう。それは、ジェンダー研究を視座としつつ、既婚／未婚、育児に携わっている／いない、あるいは女性／男性といった差異を乗り越えて、多様な立場からの議論・対話を展開し、若手研究者における育児との関わりのあり方を模索していくことである。ゆえに、本 WG は、育児中の若手女性研究者による「ママ・サークル」といった活動ではなく、むしろ「育児」に関する規範や信念、慣習を一歩引いた立場から改めて捉え返し、あらゆる若手研究者同士で互いに理解を深め、ときにそれらの問い直しを試みることに重点を置いている。本冊子において、こうした側面は、理論編として、論考、コラム、ブックレビューで提示することに努めている。

WG がキーワードとしている「育児」という言葉は、確かにとてもありふれたものであ

り、研究とは縁遠いものにみえる。しかし研究者のライフスタイルにおいて、研究活動の維持や研究職の模索という実生活の文脈と交わったとたんに、それは研究生活との兼ね合いにおいて改めて考慮されるべき重要なキーワードとして私たちの前に立ち現れることになる。たとえば、それは、経済的・身体的負担や時間的拘束を意味する場合もあるだろうし、また、パートナーとの兼ね合いや親族からのプレッシャーといった精神的負担につながる場合もあるかもしれない。あるいは、それは研究生活をより豊かで輝かしいものにしてくれるビッグイベントとしてあるかもしれない。いずれにせよ、今のところ「育児」は、若手研究者にとって当事者にしか立ち現れないものである。そして、この場合の当事者とは、おもに女性であるのは言うまでもない。実際に目前に立ち現れないうちは、若手研究者にとって研究とは無縁のとるにたらない問題として認識されてしまう。その結果、これまで「育児」の話題は当事者同士による身内話で終わってしまう傾向が強く、若手研究者全体で議論し、理解を深め、協力していく態勢が取れていない状況が続いてきたように思う。

このような現状を鑑みると、当事者／非当事者、経験者／非経験者といった分断、あるいは女性／男性といった分断こそが、若手研究者における育児の困難・不安などにつながっているのではないか、ということに改めて思い至る。ここに、本 WG は、さまざまな立場からの「育児」へのアプローチの重要性を見出したわけである。

そうした信念のもと、本冊子では実践的な側面と理論的な側面から多角的に現在の「育児」を見つめかえした。それによって、これまでのように研究の場において、育児していることを極力隠さなければならなかったり、「育児を言い訳にすべきでない」と自分自身や他者に強要したり、経験していないから育児について語ることはできないと口を閉ざしたり、良い母であろうとして研究活動を諦めたり、自分のジェンダー／セクシュアリティを育児に適さないと悩むといった「なくてもいいはず」である障壁や規範を可視化し、本冊子を手にとったもの同士が理解し合い、場合によってはともに乗り越えるきっかけを創ることを目指したのである。本冊子のタイトル『〈育児〉を契機とするクロスオーバー』はそうした想いを込めたものである。「育児」という問題系を契機として、若手研究者同士のあらたな出会い、相互理解、交流につながることを切に願う。

このたび、幸運にも本 WG の成果を本冊子にまとめることができ、大変嬉しく思っている。だが一方で、WG の基盤である F-GENS が本冊子の刊行とほぼ同時に終了してしまうことはまことに残念に思われる。しかし本冊子の刊行を契機として、F-GENS の若手支援の一成果ともいうべき本 WG が、新たな基盤を獲得して今後さらに展開していけるよう、努力を惜しまない所存である。

最後に、この場を借りて、本冊子の作成に尽力してくださった WG のメンバー、積極的な投稿をしてくださった執筆者のみなさま、そして、お忙しいスケジュールのなか快くインタビューに協力してくださった本学の郷通子学長、本学いずみナーサリー施設長の冨永典子先生に深謝申し上げたい。そして、この WG の設立から本冊子の発刊にいたるまで、全面的に支援してくださった戒能民江先生、菅聡子先生、JSGS-Net の松尾江津子さん（COE 研究員）、そして F-GENS 事務局の蝶谷綾子さん、吉原公美さんに心からお礼を申し上げたい。どうもありがとうございました。